

2026年1月

## 課題本 『スモールワールズ』

一穂 ミチ/著 講談社 2021年

### ◆◆◆12月の読書会から

先月の感想文を読んでそれぞれ感じたことを共有しました。また、先月に疑問点として出されたことを当番が調べて答えてくれてさらに理解を深めることができたのではないのでしょうか。

今月の課題本は『スモールワールズ』です。著者は一穂ミチ、夫婦円満を装う主婦と家庭に恵まれない少年について書いた《ネオンテトラ》から始まる6つの短編から成る作品です。

(文責:森下)

### 2026年1月 竹原読書会 『スモールワールズ』

(一穂 ミチ/著 講談社 2021)

吉川五百枝

前回は24の短編を、一人の女性の切れ味鋭い感性として読んだ。今回は6篇の作品集だが、先月よりも落ち着かない。座席の小さなイスにすわっている感じがする。私の座り心地の悪さとは、つまり自分の基礎知識が極端に少ないのに、フィクションと解っていても、他人の生活の光陰を手量りするような不遜さを感じてしまったからだ。作者が、それだけ物語をリアルに仕上げているといえるのかもしれない。前回の本を読むおもしろさは、言葉によって読み手の視点が多様化することだった。今回は、社会的関心事のオンパレードで、多様な切口は、読み手の意識をぐいぐいと押し広げる試みだったろうか。

ただ《魔王の帰還》だけは、作者の手を借りることなく静かに読めた。

表紙も裏表紙も、各篇の題名の頁にも、建物と見える「立体」の写真がある。複数だが、一つずつ自立している。この「立体」は、次の篇の題名の頁に、前篇の一つだけ繋がれていく。表紙と裏表紙の「立体」は、コップやお皿、鉢、スプーンと共に置かれていて同じ方向から光を受けている。暮らしの中にあるけれど、外から見たのでは解らない中身を持ち、しかも、なにか繋がりを感じさせる「立体」群だ。

最初の作品《ネオンテトラ》は、6篇目の《(式日)》と重なる。残りの4作品の筋は独立しているものとして読んだが、1篇目の最後で主人公が目を合わせるトラック運転手が、2篇目の「魔王」ではないかと思わせるなど他の篇の登場人物も、いくつか、別の篇に映してみたくなったのは、関係の有無は見た目では解らないという暗示か。

1篇目の題名にもなっているネオンテトラは、主人公相原美和が3年前からマンションの自宅の水槽で飼う30匹ほどの熱帯魚である。群れで飼うことが多いが、繁殖は難しいようだ。美和は、強い妊娠願望をもっているがなかなか願いが叶わず、その事で息苦しい。ネオンテトラの世話をすると現実から解放される。28才までに2度流産し、子どもが居ない夫婦の幼い屈辱感と無力感に苛まれる日々だ。広告代理店に勤める夫は、仕事で知り合った。しかし、

夫のスマホの向こうに、不貞の匂いがプンプンしている。

この夫婦に波乱を持ち込む存在として、姉の娘、姪の有紗が登場する。姉夫婦は海外駐在で、有紗は祖父母と暮らしている。

美和の自室から高速道を挟んで向かいのマンションで見る中年の男と少年。ガチギレの父と蓮沼笙一だった。笙一は有紗の同級の中 2 である。この笙一に保護者意識をもった美和の介入が始まる。笙一とのあいさを重ね、美和は心地よさを持って笙一に自分の気持ちを支配させる。ところが、有紗は笙一を美和の留守部屋に招き入れていて、ついに妊娠してしまう。パニックになる母、苦い顔の父。美和だけが有紗を励まし、生まれた子どもを自分たちの養子にして美緒と名付けた。夫も溺愛している。

「私を下手くそに慰めてくれた笙一の分身を大切に育てたい」美和のこの複雑な精神状態が、この篇のポイントなのだろうか。〈子どもを手に入れた途端〉と作者は書く。ネオンテトラは捨てられた。そして、笙一の若い命も交通事故で消えた。笙一という美緒の父親の名を誰にも明かさなかった有紗も、美和の歴史から消された。

笙一に〈どんな風に大人になったの?〉と聞きたいという美和の思っだけが、最終篇《式日》に形を変えて続いていく。

《式日》の主人公は、「自分」というが、文字としては「先輩」となる。親は居ないから施設で育ち、中卒で働きながら貯金して、高校定時制に入学しその3年目だ。

「後輩」は、6歳下の昼間の高校二年生。「俺」という。昼間と定時制の違いがあったが、同じ机をつかっていたので、机の中に紙切れを入れて二人のコミュニケーションが成立した。

「明日の父の葬式に来て欲しい」という後輩の父は〈アル中のくず〉で飛び降り自殺をしたという。【私→自殺したのは《ネオンテトラ》の向こう側のマンションのベランダに居た笙一のガチギレの父親だろう。後輩は、つまり笙一である。】

〈アル中は、どんだけ誓っても元に戻ってしまう。〉繰り返し裏切られたが、相手が肉親なら断ち切るのは難しい。俺は、何度も死んでくれと思った。家を出てから2年ぶりに死体の父と対面した。葬式の喪服の内側を作者は書く。〈黒い服の内側で罪悪感憎悪悲しみ、その他何色にも分けられない感情がせめぎ合っているに違いない。〉

後輩が型通りの葬式をするのは罪悪感をせおっているからだという。〈死んだ人間の器を燃やすことで精神的にも物理的にも、肩の荷が居り気持の区切りが付くのだろうか〉と自分は思うが、式後の収骨までの時間はどのグループもなごやかなのだ。

待ち時間に、後輩の「俺、子どもいるんだよね たぶん。」それに続く事情が語られる。俺の相手は中学の同級生で、子どもが出来たらしいのは中 2 の時。彼女が「赤ちゃんできた。生みたい」と泣いて電話をしてきたが、その後学校に来なくなった。俺は、当時父親にばれたら殺されるって、それしか頭になかった。それから連絡が無いまま 4, 5 年たった。【私→そう。彼女は出産し、子どもは叔母の養子になっている。子どもに会うことは拒否されている。】後輩は、きれい事しか言わない教師とか、気まぐれに構ってくれる近所の人とかいっぱい憎んできた。世間に対して身構える若い笙一の葛藤が語られていて、その気持は読みながら切なさを覚えた。

時間待ちで出た街で後輩はネオンテトラを発見した。【私→笙一には、ネオンテトラは忘れられない魚だろう。繋がれない事情になってしまった思い出の水槽風景だから。しかし、彼

の見たネオンテトラは、あっさり捨てられている。それでも、笙一にとっては、ネオンテトラは生きている。繋がり無い繋がりを思い出させて。】

父親は自殺し、母親は笙一を残して姉妹と一緒に家を出てしまった。後輩は、やがて交通事故で亡くなる。二人の会話〈誰の人生も激動だよな〉という言葉に頷いてしまう。【私→確かに、誰にとっても激動の人生だが、受け止め方は色々あるだろうに。】

窓外の街の景色〈あれらの窓の内側に、孤独も痛みも後悔も暴力も当たり前存在し、光という闇だってあるのだと解っていても惹かれてしまう。〉あの「立体」は、見えないけれど埋没させることの出来ない関係性の意味をもつのだろうか。

〈家庭はブラックボックス。〉〈本当のことが整理できるとは限らない〉〈他人に紐づけていると人生がどんどん不自由になる。〉いくつかのフレーズが心に残った。

## 『スモールワールドズ』を読んで

### ◆ 【 ZK 】

歪な家族を描いた短編小説。なぜかほとんど誰かが亡くなっていく。

《魔王の帰還》では

なんと、言葉が完全に男で姉御肌なお姉さんが登場でガハハと笑ってしまう。しかし、弟にも旦那様にも寄り添っていろいろ励ましている。

《愛は適量》では、

人にどこまで尽くすべきなのか考えさせられます。教師として親として、特に子供にどれくらいの金銭の世話をするのか？

他には《花うた》では

直に文通して向き合うことがお互いを知り合う事になっている。

《式日》では、葬式に寄り添っている。バスに乗って眺めている風景が印象的でした。

いつも誰かが亡くなっていることが私には心が重くすっきりしませんでした。

以前『少年と犬』という短編を読みましたがそんな感じです。それぞれの登場人物が互いの短編に登場しているかも？と会で聞いてなるほどと思いました。

昔の時代ではなく現代の小説ですが、今は、昔より経済は豊かですが、家族の愛情にみんなそれぞれの立場で飢えていることは昔と変わっていないと思います。

### ◆ 【 JM 】

メルヘンチックな絵の表紙やディズニーランドのアトラクションを想起させる題名からハートフルな物語を想像していたが、読み始めると心がざわざわして落ち着かない気持ちにさせられた。後でこの本は担当編集者からの「歪な家族」というテーマに沿って書かれたものだと知り、納得した。何をもち「歪」と捉えるかは人それぞれであり、基準はない。しかし、読後ざわざわさせるというのは作者の意図にはまった結果であろう。

6話収められているが《魔王の帰還》が心のざわざわがなく、好きな物語だった。主人公鉄二の姉真央(魔王)のキャラクターがいい。まっすぐである。私を含めて人は周りを気にしたり、常識や世の中の当たり前というしがらみにとらわれがちだが、自分の思いにまっすぐである。その真っすぐさが爽快である。

人は皆、それぞれ鬱屈を抱えていると思う。その鬱屈を表面に出すか、身の内の奥にしまい込んでいるかもそれぞれだ。そして、人は見たものしかわからない。鉄二の野球部を辞めた理由や転校した理由を誰も知らない。菜々子の背負っているものも誰も知ろうとはしない。その人の身の内の奥の鬱屈に思いを馳せることは難しい。自分の思いの通りに生きることも難しい。

人は見えるもの、見たいものを見、知ろうとはしない。もちろん見せたくないものもあるが、見たいもの、見えるものだけを見ては、その人を理解できないだろう。人を理解すること、自分自身が自分の気持ちを大切に生きることについて考えさせられた。真っすぐに生きている(ように見える)魔王が清々しくてかっこいい。

この3人の続編を長編で読んでみたい。

## ◆【 T 】

6つの短編でできていて、様々な家族が形づくる家庭という小さな世界(スモールワールド)を描いている。全く異なる話のようだが最初の《ネオンテトラ》と《式日》では笙一が、他の話の中にもそれ以外の話の登場人物が出てきて、ゆるくつながった話になっている。

《ネオンテトラ》《式日》…共に暮らしていても夫婦で理解し合えない寂しさ。子どもが欲しいために有紗の行いを黙認してしまった美和の身勝手な行動。笙一の母は何故娘二人だけ連れて家を出たのだろう、笙一が父と折り合いが悪く虐待されていたのを知っていたのに。残された笙一は、諦めと絶望の中で生活していたのだろうな。彼は自分からトラックにぶつかっていったのではないだろうか。

《魔王の帰還》…真央と勇お互いの深い思いやりに感心した。真央のために別れを切り出した勇、勇のために別れようとした真央。六つの中で一番好きな話だった。

《ピクニック》…家族を思うゆえの隠蔽だが、それが次の悲劇につながった。別のやり方はなかったのか？と最初の父の行いに疑問を持った。このままだと悲劇はまた繰り返されていくのではないかな。

《花うた》…秋生を襲った悲劇が悲しい。引き続き彼の心の成長や深雪との交流を見たかった。刑務所での〈何でもいいから物語を作る〉というプログラムで秋生の作った物語は彼が深く自省していることがよくわかる内容だった。

《愛を適量》…適量というのは難しい。人により、環境により、時代により、力関係等により適量は変わる。佳澄が父親を訪ねてきた目的は不純ではあったが、成人した彼女と父親との交流でお互いの気持ちが通じ合えよかった。

読み終わって、希望を感じる話や今後穏やかに支え合って暮らしていくのだろうと予感できる話がある一方で、これからどうなるのかな？このままでは難しいだろうと思う話もあった。一人一人の小さな世界(家庭)が集まってこの世の中を作っている。家庭の中で家族として暮らしていくことの幸せと家族だからこそその難しさが描かれている話だと思う。

## ◆【 KH 】

### 《愛を適量》

慎吾は何かにつけて、適量を“はかれない”。例えば、料理のお塩少々、これが計れない。と言うか加減がわからない。相手との距離を測れない。相手にかける愛情の適量を量れない。相手の気持ちも量れない。どうやってコミュニケーションをとるか図れない。相手のもくろみを計れない。どんな意図を持っているのか量れない。しまいには謀られる。なんだか、同訓異字のテストみたい。あっているのだろうか？

そもそもこの話の主人公は、父なのか？トランスジェンダーの娘なのか？何かにつけて“はかれない父親”が、気持ちよく見事なまでに娘に騙される話。

だとするとやはり主人公は父、慎吾。妻との離婚後、15年振りに突然押しかけてきて、身の世話を甲斐甲斐しく買って出る娘、佳澄。ほろりとしめない親はいない。まして、何もかも面倒臭くなっている初老の男、佗しい一人暮らし。タイへの渡航費、手術代ぐらい出してもいいかと、(今までの罪滅ぼしとして)ふらっと思ってしまう父。娘との空白の15年間、彼女がどんな風に学生生活を送り、社会人として働いてきたのか、さらりと佳澄の口から語られたことだけでは、それこそ計り知れない、のに…。

「愛を適量」処方して、まんまと500万円を手に入れたのは娘なのだから、彼女が主役と言えないこともない。いや、しかしである。それだとあまりに父が浮かばれない気がして、気の毒になってしまう。慎吾はこれからも、はかれない男として老いていくのだろう。佳澄との最後の会話を救いとして。父の中では永遠に、一人娘の「佳澄」が息づいている。

最後の最後にくるとひっくり返すのがうまい作家だ。単純、能天気な私は、どの話もえっ？？そうくるか…の連続であった。

## ◆【 望月悦子 】

課題本の表紙『スモールワールズ』の絵は、メルヘンチックな一つ一つの形は立体ではあるが、それぞれが異なっている。「スモールワールド」ではなくて「スモールワールズ」である。一軒一軒の小さな家庭生活が一つの小さな世界として書かれているのだろうか。

今回の読書会の担当者が準備くださった資料によると、「小説現代」の担当編集者から「歪んだ家族」をテーマにとの依頼を受けて書き上げたようである。

著者は、《魔法の帰還》はコミカルなタッチに表現し、《ピクニック》は軽めのホラーのつもりで書いたとのこと。私は、小説とは面白いなあと思う。読み手と書き手の受け止め方が異なるの

だから。

《魔法の帰還》はコミカルというよりは、真摯に生きること、本当の優しさとは何かをテーマにしたように受け止めた。表現はコミカルで軽く展開されているように見えて、実は今の世の中に欠けている姿を揶揄してコミカル風書き上げているのではないか。『二番目の悪者』（林 木林著 小さい書房）同様何事も確認しないで噂を流し、何も考えずにそれに同調して他人を苦しめる姿は全く同じである。ただこの本では、鉄二・ねえちゃん(魔王)・住谷奈々子の3人が理解し助け合い庇いあいながら、噂を乗り越え、それこそコミカルに真摯に愉快地楽しく生きていることである。『二番目の悪者』では、最後世界から何もなくなっている姿が印象的であったが、この本では、見かけの言動は乱暴で押しの強いねえちゃんが、「奇跡は起こらない、起こらないから傍にいてやれ。最後には負けが決まっているシナリオでも、立ちほだかるからこそ魔王なんだろう」と、最後不本意ながら妻(ねえちゃん)のことを考えて別れようとする夫の思いを受け止め、自分の思いに忠実に難病の夫のもとに突っ走っていく姿は圧巻であり、我欲を捨てたこれほどの優しさがあるであろうか。

《ピクニック》は、「残酷なおとぎ話みたいなものを書きたいと思っていた。絵本のような語りで」と書き上げたものが、日本推理作家協会賞の短編部門候補にノミネートされている。本人は「ちょっとしたたねのある軽めのホラーくらいの気持ちだった」とこの短編を仕上げたとのことであるが、「子育て」について書き上げたものと思えていた。今の若い母親が育児にどれほど苦しんでいることか。前半部分では、苦しくてしんどい時もあるが、大変な時はしばらくの間だけで喜びも多くもたらしてくれる。またゆとりのないときには、自分中心になって夫婦喧嘩を重ねながらも、子育ては親(自分)育てでもあると育児に対するエールのように思えた。しかし読み進むうちに「命」をはぐくむ子育てを軽めのホラー、ミステリーの題材に使わないで欲しいとむくむくと怒りを覚えた。

母希和子のちょっとした不注意から孫を死なせてしまった時の警察の取り締まりには、小説とはいえ怒り心頭。乳幼児揺さぶられ症候群(SBS)やら希和子の子どもが死んだ件のいきさつやらを持ち出し、20日間も拘留して彼女を心理的に追い詰めていく。そもそも刑事がSBSの専門的知識をどれほど理解しているのか、子どもを亡くした母親の気持ちや心理状態がいかほどのものであったか、それについての理解と優しさが持てるのかと。

我が子を亡くした時の希和子の姿を知っていた叔母から真実を聞かされて、娘夫婦は納得し、母希和子の悲しみが共有できた。最後には極限の体験は言葉を失ってしまうことを理解していく。この短編の最後に「真美(孫)とおかあさんを絶対に二人きりにしないで。お母さんの中に眠っているものを2度とおこさないようにして。お願い。私を信じて。早く」で完了している。家族の優しさは分かるが、子育ての小説としてはいただけない。私としては、それだけでなくも少子化の時代こんな軽めのホラーとはいえ、読んでいるうちに「やっぱり子どもを産むのをやめとこ」になってしまわないだろうか。そういうことを懸念して「子育て」を軽めのホラーやミステリーなどの材料にはしてほしくないと切に思った。が偏りすぎだろうか。今回の課題本で考えさせられたことでした。

## ◆【 MM 】

6つの短編集からなる課題本、最初の《ネオンテトラ》から、これまで感じたことのない、もやもやした、救いのない結末で、見てはいけないうものをのぞき見しているような感覚だった。主人公の美和は直接的にもしていない。でもそうなるように隙は作った。それにはまったのが姪の有紗と同級生の笙一だ。有紗に寄り添い救う体を装いながら、幼い体に宿った赤ん坊を生まれた後養子にするよう整える。そして二度と子供には会わないと約束させる。うまくいったように見えるが、この先は描かれていないものの、どんな未来が待っているのか…明るいそれが待っているようには思えなかった。

2つめの《魔王の帰還》、これは1作目とは異なり結末には救いがあるように感じた。しかし物語の中では強豪校の中で繰り返される指導者からの罵声と上級生からの体罰やいじめに反抗した鉄二がかばった同級生の友達からは感謝されることもなく疎まれ、転校して今に至ることが描かれていた。正しいことをした人がその場にいらなくなる、野球の道を断たれることには納得がいかないが、暴力に暴力で向かっても思う結果にならないか…と諦めの心境になった。姉と勇夫婦の件も、相手を想うが故の離婚届と看病と介護の決意でどちらが正しいとは言い切れない。私が勇の立場だったら勇の気持ちもわかるし、姉の立場なら大変な時こそ支えたいという気持ちも理解できる。1つめの話とはまた違った意味でもやもやした。これは答えが出ないもやもやだ。

3つめの《ピクニック》、これは一番怖かった。最後まで読んでそれまで霧に覆われていた事実が悪い意味ではっきりしたからだ。生まれた子供と二人きりにしないで！ そうしないと悪夢が繰り返されるだけだ。物語をこんなに引っ張っておいて救いのない結末、というか悪いことが予想される結末、もう本当に意地悪なんだから…と気味悪くなりながらも次の章は何を描くのか意地悪い気持ちで待つ私がいた。

4つめの《花うた》、これは私好みの話だった。しかしこれもまた始まりはいいものではなく、深雪と秋生の出会いは加害者と兄を殺された遺族、という関係からだった。手紙を交わすうちにお互いを理解しようとしていく。秋生は反省とは何か、ということに向き合うことから始めようとする…が、刑務所内で事故に遭い記憶障害が残る。深雪は秋生を引き取り結婚するが、深雪自身も病魔に侵されている。これも救いのない話だ。でも最後に秋生が書いたものがたりの中で、以前の秋生が見えたようでそこがよかった。答えのないものを書くこと、この社会にある様々な問題を描く作者の頭の中はどうなっているの…と思う。

5つめは《愛を適量》、この話はトランスジェンダーについてとりあげている。これも終盤、娘(心は息子)・佳澄に裏切られる主人公だが、佳澄は再会するまで主人公に裏切られていた気分だったろう。佳澄にあげようと思っていたお金をとられただけだ。いや、「だけ」とは言い切れない金額だったけど…佳澄のもとに行くお金だったことには変わらない。相手に差し出すお金を盗ませるとはまた後味が悪い。でも父が佳澄に言った呼び名について、そして名前の由来についての場面は温かい気持ちになった。

最後は《式日》、高校の教室で出会った二人の物語。全日制と定時制で利用する時間は別だがひよんなことで友達になる。施設で育った主人公とDVをする父親と二人暮らしの後輩。その父親が自殺して死ぬところから物語は始まる。話の中で後輩が同級生を妊娠させ子供がいる話が出るが父親としての自覚はない。空をつかむような感覚だった。

今回の課題本について、読書会の中では辛口の意見が多かったが私は好意的に受け取っている。いいとか悪いとか答えが出ないことを書くのがうまいな、と思った。一つのこととその反対のことに同時に焦点を当てる。答えは自分で考えてもいいし、答えが出ないことである、と思ってもよい。どちらともいえない、どうしようもないことについても知ること、考えることが大事だ。課題本の当番からの資料でこの短編集は歪な家族をテーマに書いた、とあった。それぞれの家族と社会の問題やら人生に起こる出来事を絡ませて描いている。読書会のおかげでほかの作品も読みたい作家が増えた。